

『狂言記』『狂言記外篇』『続狂言記』『狂言記拾遺』における「(さ)しめ」について

中川美和

1 はじめに

『狂言記』『狂言記外篇』『続狂言記』『狂言記拾遺』については、池田廣司(一九七九)一二二頁〜一二五頁によると、次のように位置づけられている。

『狂言記』

どの台本にも類似しない曲が五十番中三十一番の多きを占め、用語においては他編に比べて俗語的表現が圧倒的に多い。固定前の大蔵流や、大蔵流の配下にあつて歌舞伎と交流のあつた群小諸派の町風の狂言台本によつたもの。

『狂言記外篇』

虎明に近い曲が十七番。三百番集に類似するのが九番。どの台本によつたか判断できない曲が二十番(もっとも、虎明本に近い曲が多い)。筋立てやせりふもかなり自由であつた固定前の大蔵流や大蔵の弟子であつた三宅家の町風の台本に拠つたもの。

『続狂言記』『狂言記拾遺』

虎明本に近い曲が十八番と十七番、虎寛本に近いものが十三番と十一番、三百番集に近いのが三番と四番。群小諸派から遠ざかり、刪定あるいは固定せる大蔵流を多分に反映した台本によつたもの。

以下、本稿では『狂言記』『狂言記外篇』『続狂言記』『狂言記拾遺』をあわせて「版本狂言記」とよぶ。

版本狂言記におけるそれぞれの曲が、何流の台本に依つたものか、については、池田廣司(一九六七)に詳細な位置づけが示されている。

また、その分類に従つた「おりゃる」について大倉浩(一九八五)に言及されている。しかし、筋立ての類似による曲の分類の一方で、それぞれの曲において使用されている語によって、各曲が何流あるいはどの台本に依つたものか、という分類を行うこともできるのではないか。すでにこのような観点からの、版本狂言記の曲の位置づけ、さらに各狂言台本の位置づけの重要性が、大倉浩(一九八五)(一九八六)(一九八七)(一九九一)(一九九五)、小林賢次(一九八〇)(一九八五、二)(一九九〇)(一九九三)(一九九四)などに指摘されている。

その一つとして、本稿では助動詞「(さ)しめ」をとりあげたい。また、版本狂言

記における「(き)しめ」のあらわれ方をみると同時に、「(き)しめ」の周辺の語についてもみていきたい。

2 問題のありか

2・1 助動詞「(き)しめ」について

蜂谷清人(一九七七)において、天理本における助動詞「(き)しめ」は次のように整理されている。

未然	連用	終止	連体	已然	命令
	しむ	しまふ			
	しまふ			(き)しめ	

「しまふ」は湯沢幸吉郎(一九二九)によれば「セタマフ」「サセタマフ」の転とされ、また命令形「(き)しめ」は「シマへ」「サシマへ」の転とされる。¹⁾

蜂谷清人(一九七七)ではさらに、天理本では「しまふ」は「しまふ」「しむ」の形が少数ながら用いられているものの、命令形「(き)しめ」を除いてはほとんど消滅しかかっており、また虎明本でも「しむ」「しまふ」の形は全くみあたらない、という。

本稿では命令形の「(き)しめ」を考察の対象とし、他の活用形はとりあえず考えない。

2・2 「(き)しめ」の敬意について

助動詞「(き)しめ」は、湯沢幸吉郎(一九五五)に「敬意を表わす助動詞」とされている。

一方、ロドリゲス『日本大文典』に、「甚だ下品な言い方であって、その中に非常に尊大ぶった気持を含んでゐて対手を甚だしく軽蔑するものである。だから、自身自身の召使に対して使つてよい。」(土井忠生訳注一九五五、六〇頁)と記述されている。

しかし、虎明本の「(き)しめ」の用法は、太郎冠者と次郎冠者という召使間や、夫婦間など、同等の関係において用いられる用例が最も多く、また、「軽蔑」というよりは、丁寧な言い方である。たしかに、大名から太郎冠者へ、という目上の者から目下の者へという使用例もあるが、「(き)しめ」は、同等あるいは同等以下の相

1 湯沢幸吉郎(一九五五)では、未然形に「(き)しも」「(き)しま」、連用形に「(き)しむ」「(き)しむ」「(き)しむ」、終止形に「(き)しむ」「(き)しま」「(き)しまえ」、已然形に「(き)しまえ」「(き)しまえ」、命令形に「(き)しめ」「(き)しまえ」があげられている。また、大塚光信(一九六六)(一九八六)では、抄物の例の調査から、シマワーシマーシムの順を想定している。

手に対して用いられる、「軽い敬意」を表す表現であるといえよう。²あるいは、蜂谷清人（一九七七）では「親愛的な相手に対する一般的な命令表現」（一三八頁）ともいわれる。³山崎久之（一九六三）七〇七頁によれば、「(き)しめ」は対称代名詞「わごりょ」「おぬし」に対応するという。

この「(き)しめ」と同じ程度の敬意をあらわすものとして「(き)しませ」がある。「(き)します」は「しまふ」よりも新しい類のものと考えられる（蜂谷清人（一九七七）二六七頁〜二六八頁）。

3 大蔵流に特徴的な「(き)しめ」

鷲流保教本狂言台本では、大蔵流虎明本における「行かしめ」「見さしめ」にみえるような助動詞「(き)しめ」について次のように述べている。

見サシメ 行シメ サシメ 大蔵方ノ言葉也（『狂言綺語』『芸稽古伝』
十八ウ）

此言語道断ト云ト見サシメ居サシメ杯云言葉大倉三遣フ事也 鷲ノ方ニ
無之言葉也（『富士松』七十七ウ）

このように、「(き)しめ」が、鷲流保教本において、大蔵流のことばとして捉えられていたことは、蜂谷清人（一九八六）、小林賢次（一九八五、五）などにおいてすでに指摘されているとおりである。

また、実際に各流派の台本ごとに「(き)しめ」のあらわれ方をみても、虎明本に「(き)しめ」が多くあらわれるのがわかる。先行研究にしたがって、「(き)しめ」を「(き)しませ」と比較する。「(き)しめ」と「(き)しませ」⁴の使用状況をみると、次の通り。

(1)「(き)しませ」と「(き)しめ」の用例数

	虎明	天理本	狂言記	狂言記外篇	続狂言記	狂言記拾遺
(き)しませ	7	72	23	20	62	39
(き)しめ	310	9	3	18	27	22

虎明本に圧倒的に多い「(き)しめ」は天理本狂言六義にはあまりみえず、かわって「(き)しませ」の例が多くみえる（天理本の「(き)しませ」の用例数は、蜂谷清

² すでに先行研究がのべるとおり。たとえば辞書でも「軽い敬意を含んだ命令」（『古語大辞典』）、「軽い敬意を伴う勸誘命令の助動詞」（『角川古語大辞典』）という。ただし、敬意の程度は、蜂谷清人（一九七七）二七二頁）にもあるように、「ごく低いものである」。

³ ただし、なぜロドリゲス「日本大文典」の記述とことなるのかは、わからない。亀井孝（一九四四）では、ロドリゲスの記述に関して、「もはや當時は極めて敬意が薄れてみて、恰も大名が太郎冠者に尊大な態度で臨む場合などに適當な音ひ方となつてゐたものである。實際には、もはや餘り用ゐられなくなつてゐたものかと思はれる。狂言は、この「しめ」を舞臺用語として取入れたものである。」という。

⁴ 「(き)せ」「せ」は略へ。

人(一九七七)二七二頁によれば七十数例)。また、鶯流保教本では、蜂谷清人(一九八六)によれば「(き)しませ」は、「数多くの用例が見られる」が、「(き)しめ」はわずか二例で「小歌など限定された場面でしかも例外的に用いられている」という。さらに、蜂谷清人(一九八六)によれば、虎寛本でも「(き)しめ」が優勢である、という。

このように、「(き)しめ」は大蔵流のことばとして捉えられており、実際にとくに虎明本に多い。

虎明本と天理本における「(き)しめ」と「(き)しませ」の分布の違いについては、蜂谷清人(一九七七)にすでに指摘がある。蜂谷清人(一九七七)は、次のようにいう。

語の成立およびその後の勢力の消長(他の語形を含めて)の様子を考えると、成立の新しい「(き)します」の方が、室町時代末頃において「(き)しめ」よりも幾分勢力を持っていたとも思われ、それが天理本などに反映しているとも考えられる。もっとも、虎明本の場合と比べて考えてみると、少くも江戸時代初頭には、一般にはどちらも勢力を失って居り、狂言では伝承に従ってこれらの語を用いたが、そのどちらを主に用いるかは、きわめて便宜的に決定されたと考えられるようにも思う。「しむ」「しまふ」の使用などから、天理本に室町時代の古態が比較的多く残されているという推測もされるが、いずれにしても全体に関して一様に述べられる性質のものではない。ちなみに後の虎寛本、古典文庫本では「(き)しめ」の方が優勢であるが、あるいは虎明本などにその範を求めているのかも知れない。(二七二頁)

では、版本狂言記(『狂言記』『続狂言記』『狂言記拾遺』『狂言記外篇』)はどうだろうか。

「(き)しませ」との対比では、やはり「(き)しめ」よりも「(き)しませ」の方が多い。しかし、天理本ほどの大きな差はなく、とくに『狂言記外篇』などはほぼ同じとみてよい。版本狂言記の「(き)しめ」については、どの台本に用例がみられるのか、というところまで細かくみていく必要があるようだ。

さて、本稿では

よう分別【(き)しめ】

あまりせはしうてわるひ、ちとそちへくつろが【しめ】

なふ／＼としや、こちへ【わたしめ】(虎明本「ちぎりき」中二〇二、二〇三頁)

などの「(き)しめ」が、保教本に指摘されるように、大蔵流に特徴的な語であれば、版本狂言記にあらわれる「(き)しめ」は、大蔵流台本とくに虎明本に近似していることを示す、とすることができるとは思えないか、と考える。

そこで、まず、「(き)しめ」の含まれている曲について、池田廣司(一九六一)による位置づけと照らし合わせる。そして、「(き)しめ」があるにもかかわらず、大蔵流との近似が指摘されていないものについて、筋立ての近似を再確認する。

同時に、『狂言記』その他における「(き)しめ」の周辺の語についても考え、『狂言記』の台本の語の使用の側面を捉えようところをみる。

4 版本狂言記における「(き)しめ」のあらわれる曲

版本狂言記における「(き)しめ」のあらわれる曲と「(き)しめ」の用例数(踊り字分は数に入れない)は付表のとおり。

このなかで、「竹子争」(『続狂言記』)(せりふに一致する点が少ないが、筋立ての虎明本と同じ曲)や「鎌腹」(『狂言記外篇』)(虎明本に近いもの、一致するせりふは少ないが、筋立てが虎明本と同じ曲)などは、「(き)しめ」の用例数が多く、かつ、池田廣司(一九六七)において、虎明本との類似を指摘されている。

だが一方、池田廣司(一九六七)の記述と一致しない曲もある。

(2) 大蔵流との近似が指摘されていないもの

『狂言記』

「粟田口(1)」「筋立て、せりふなど各台本とも大差なく何流の台本に拠ったか判別しかねるもの」

「武悪(2)」「筋立ては同じであるが多少せりふに相違があるもの」

『狂言記外篇』

「千切木(1)」「早漆(1)」「八幡髻(1)」「昆布柿(1)」「骨皮新発意(1)」「ただし新発意と旦那の間答、留めは虎明本に類似」「靱猿(1)」「ただし、猿唄などは虎明本に近い」(どの台本にも近似しないもの筋立てにさ程の差異がなく、また記述が筋書程度の簡略やト書きが多いなどの点からどの台本に近いか判別しかねるもの)

『続狂言記』

「土産の鏡(1)」「筋立てが相違し、せりふなども俗語が多く、かなり異なる曲」(ただし、鏡売場、鏡の由来などは虎明本に類似)

「箕潜(1)」「どの台本にも近似しないもの、筋立ては同じであるがせりふなどに大分相違がある曲」

「河原新市(3)」「どの台本にも近似しないもの、筋立てが相違しせりふなども俗語が多くかなり異なる曲」

「六人僧(1)」「どの台本にも近似しないもの、筋立ては同じであるが多少せりふに異同がある曲」

「六地藏(1)」「どの台本にも近似しないもの、筋立ては同じであるが多少せりふに相違のある曲」(すっぱの類、地藏の由来などは虎明本に類似)

「柑子俵(1)」「筋立てが相違し、せりふなども俗語が多く、かなり異なる曲」

「三人片輪(2)」「一致するせりふは少ないが筋立てが三百番集と同じ曲」

「樋の酒(4)」「どの台本にも近似しないもの、筋立てが異なり、せりふなども大分相違する曲」

「松の精(1)」「何本の台本に拠ったか判別しかねるもの」

「料理髻(1)」「一致するセリフは少ないが筋立てが三百番集と同じ曲」

このように、「(き)しめ」の出現する曲については、池田廣司(一九六七)による位置づけと合致するものと合致しないものがある。合致しないものについては検討が必要となる。

(付表)

版本狂言記の「(さ)しめ」「(さ)しませ」

(さ)しめ (さ)しませ

狂言記

- 2 烏帽子折り
- 1 宗論
- 1 萩大名
- 8 酢置
- 1 しゝかり
- 1 こんくわい
- 2 内沙汰
- 1 薩摩守
- 1 相合傘

粟田口 1

武悪 2

- 4 武悪
- 1 腹立てず

狂言記外篇

- 1 口真似聲
- 9 今参
- 1 昆布売
- 2 魚説法
- 1 宝の槌

早漆 1

千切木 1

八幡聲 1

- 2 八幡聲
- 1 附子
- 1 川上地藏

昆布柿 1

骨皮新発意 1

金津地藏 1

鎌腹 4

饅頭食 1

手車 4

鞆猿 1

二王 2

- 1 骨皮新発意
- 1 手車

続狂言記

- 1 連歌毘沙門
- 2 秀句大名

居杭 1

河原新市 3

- 2 河原新市
- 2 になひ文

1 すみぬり女

隅争 1

土産の鏡 1

鱧庖丁 3

竹子争 4

2 隅争

3 土産の鏡

7 鱧庖丁

1 竹子争

1 金岡

3 こんぶ布施

六人僧 1

目近大名 2

六地藏 1

柑子俵 1

奇薬練 1

俄道心 1

3 六人僧

1 目近大名

4 六地藏

1 奇薬練

2 俄道心

1 禁野

猿替句当 4

箕潜 1

三人片輪 2

7 猿替句当

14 箕潜

1 磁石

3 三人片輪

狂言記拾遺

3 三本の柱

盗人連歌 3

樋の酒 4

枕物狂ひ 1

松の精 1

3 盗人連歌

1 隅かりがね

7 樋の酒

2 枕物狂ひ

2 祇園

老武者 1

1 石神

1 松ゆづり葉

棒縛り 1

水汲新発意 1

比丘貞 4

三人百姓 1

餅酒 1

料理聲 1

1 水汲新発意

3 比丘貞

3 塗師平六

2 三人百姓

1 餅酒

2 料理聲

2 茶盃拝

1 人馬

腰祈り 1

米市 1

鎧 1

3 佐渡狐

1 米市

5 筋立ての確認

筋立てを再確認すると、「さ(しめ)のみえる曲で、大蔵流の台本との類似を認めることのできるものがある。たとえば、「土産の鏡」(『続狂言記』) (他の主な台本

5 筋立て再確認の詳細は次の通り。

『狂言記』

粟田口 筋立ては天正本その他の台本ともほぼ同じと思われる。また、池田廣司(一九六七)がいうように、粟田口が子細を述べのせりふや、書物と照合する場面のせりふが諸台本ほとんど同じ。最後のほうで、大名(果報者)が粟田口を持たせる場面、大蔵流は、虎明本、虎寛本とも「さ(しめ)を用いる」(もってこれ)さ(しめ)虎明本上二九五(のように)。しかし、天理本(三八四)保教本(二)九三ウ(は)「持ってくれ」さ(しめ)「三百番集本では」持っておくりゃれ(上七九上13)。これからすると、『狂言記』の「さ(しめ)は大蔵流に似ている」といふか。ただし、和泉家古本「持ってくれ」さ(しめ)六二下(六)がある。

武悪

筋ほぼ同じ。「さ(しめ)もみられる。和泉家古本に「川魚をとりてあけ」さ(しめ)「上二四二下段13」のよう」さ(しめ)がみえる。

『狂言記外篇』

千切木

諸台本とも筋立てほぼ同じ。どの台本に特に近いかわからない。

早漆

大蔵流虎明本、虎寛本になし。曲名は、鷺流保教本と同じ。和泉流は「ぬりつけ。また「ほっぱい、ひうろ、ひら」の記述は保教本の「ホッハイ、ヒヤロ、ヒツ」と似ている。最後の謡のところでは、『狂言記外篇』以外の台本では、男たちが早く烏帽子を離してくれるように謡う部分がある。

八幡舞

曲名は天正本と同じ。他は「やわたのまえ」。筋立てはどの台本もほぼ同じ。ただし、最後に教へ手があきれて立ち去るところは、外篇には明記されていない。

昆布柿

諸台本とも筋立てほぼ同じ。『狂言記外篇』には「さ(しめ)あり」。

骨皮新発意

『狂言記外篇』は留めなど大蔵流に似ている。鳩がせりふにでてくる点、和泉流と同じ。三百番集に「さ(しめ)がみえる。

鞠狼

たしかに猿唄は大蔵流虎寛本などに似ている。

『続狂言記』

箕潜

連歌の頭が当たっている。などの筋立ては和泉流と同じ。ただし、独自のせりふも多い。和泉家古本に「又取にやら」しめ「二二下18」(三百番集にも)「さ(しめ)がみえる。

河原新市

『続狂言記』は、各台本にある、最初の夫婦の喧嘩のやりとりを、夫のせりふで片付けてしまっている。虎明本、虎寛本には「さ(しめ)がみえる。

六人僧

大蔵流、鷺流になし。三百番集だけみることができた。三百番集には「さ(しめ)が多くみえる。

六地藏

たしかに、地藏の由来は虎明本に似ている。

柑子棧

虎明本、天理本、和泉家古本では、柑子売(買)が柑子を預けるのだが、『続狂言記』では、柑子を買いくる、という点が異なっている。柑子を買いくる、というのには三百番集と共通。その三百番集では、「是へ来」しめ「二四一五上段」など、「さ(しめ)が五例あり、和泉流三百番集と似ている」といふが、と迷う。しかし、『続狂言記』は大蔵流と同じせりふ「いで喰らはふ」がみられる点、子供がみかんを食へてしまふ点など大蔵流との近似を認めてよいと思われる。

三人片輪

どの台本も筋が似通っており判断しにくい。和泉流天理本、三百番集には主に若を尋ねられて、弓を射る、茶をひく、鉢を使うなどのまねをする場面はなく、三百番集では、その場面のあと(のせりふにはあり)他と異なっている。同様の場面は、大蔵流虎明本、虎寛本、鷺流賢通本、『続狂言記』にはみえる。虎明本、虎寛本には「さ(しめ)がみえる。

『狂言記拾遺』

桶の酒

大蔵流虎明本、虎寛本では、太郎冠者、次郎冠者がそれぞれ、かる物蔵、酒蔵の別々に留守をし、別々に酒を飲んだり、謡を謡ったり、舞を舞ったりする。和泉流天理本、和泉家古本、三百番集では、太郎冠者は米蔵の留守をしていたが、結局は二人ともに酒蔵で酒をのむ、というように流派による違いがみられる。しかし、『狂言記拾遺』はこのどちらでもない部分が多い。蔵ではなく、次の間と奥の間で留守をする点、酒は酒蔵のものではない点、壁に穴を開けて桶を通す点など。ただし、酒盛りの場面では、虎寛本で「さ(しめ)が二例と多く、『狂言記拾遺』でも「さ(しめ)が酒盛りの場面に出てくる。なお、『狂言記拾遺』には「さ(しめ)もみられる。

では「鏡男」は、池田廣司（一九六七）では、「筋立てが相違し、せりふなども俗語が多く、かなり異なる曲（ただし、鏡売場、鏡の由来などは虎明本に類似）」とされている。しかし、鏡売場、鏡の由来などに限らず、全体としてかなり大蔵流寄りであるといえるのではないか。

たとえば、最初の物売りの登場は、和泉流（天理本、和泉家古本、三百番集）に共通してみられるが、大蔵流虎清本、虎明本、虎寛本、および続狂言記では、物売りが登場しない。「鏡男」は、大きく和泉流と大蔵流に筋の違いがわけられ、「続狂言記」の「土産の鏡」は、独自につけ加えた部分もあるが、大蔵流に近いといつてよいように思う。このほか、『狂言記』「粟田口」、「続狂言記」「柑子儀」なども大蔵流との近似を指摘できる。

しかし、必ずしも大蔵流との直接の類似を指摘できない曲もある。たとえば、「六人僧」（『続狂言記』巻三）は、同曲とされる曲が大蔵流、驚流にはみあたらず、「さしめ」があるにもかかわらず、大蔵流からの直接の影響を想定しにくい。同じく『狂言記外篇』「早漆」も大蔵流にはみえない。

『狂言記拾遺』「樋の酒」のように、「さしめ」の用例数も多いが、筋立てに版本狂言記独自のもののみられる曲もある。

このほかにも、「三人片輪」（『続狂言記』巻五）、「料理掣」（『狂言記拾遺』巻四）など、三百番集本との近似が伝えられている曲については、三百番集本での「さしめ」の扱いに注意する必要がある。また、和泉家古本に「さしめ」のみえる曲もあり、和泉流との近似を指摘できる曲については、問題は単に大蔵流、虎明本との類似にとどまらない。

また、同曲内で「さしめ」と「さしませ」両方を用いている曲もある（付表参照）。

松の精 どの台本もほぼ同じ筋立て。和泉流（天理本、和泉家古本、三百番集）および驚流保教本には松脂の威徳について詳しい語りがあるが、虎明本および『狂言記拾遺』には語りはみえない（虎寛本にはあるが、和泉流および保教本ほど詳しくない）。

料理掣 女房の書く字を「鳥の足型」といい、最後に「祭りに来なう」（呼ばない）云々という点は、三百番集に似ている。三百番集には、「わたりよはすぐに通ら【しめ】（上四二九下段15）」のように「さしめ」がみえる。『狂言記拾遺』には「さしませ」も入っている。

。先に、虎明本における「さしめ」の敬意についてふれた。では、版本狂言記ではどうか。「さしめ」は、虎明本と同様、召使間や夫婦間など同等の関係で用いられている用例が多い。しかし、細かい点を見ると、まったく合致するわけではない。たとえば「ちぎりき」（虎明本）では、妻から夫へ（七例）のほかが、夫から妻へ（五例）よりも「さしめ」の用例が多い。これは、他の曲では、同等といつても、太郎冠者から次郎冠者へ、夫から妻への用例のほうが多いのは、力関係が逆になっているとみることができる。しかし、版本狂言記では、夫から妻への用例一例になっている。虎明本の「ちぎりき」に、力関係が逆になっていることのおかしさがあるとするは、版本狂言記にはそれは伝わっていないようにある。また、「河原太郎」（虎明本）では、夫から妻への用例（二例）だけであるのに対し、用例はきわめて少ないものの、「河原新市」（『続狂言記』巻一）では夫から妻への用例（一例）よりも妻から夫への用例（二例）が多くなっている。このことからみると、「さしめ」をとり入れる際に、誰から誰へといったところまで厳密に伝わったわけではないようである。

6 『狂言記』における「さ(さ)しめ」とその周辺の語について

6・1 虎明本との比較

『狂言記』は、他の台本と比較して、「さ(さ)しめ」が少なく、また、「さ(さ)しませ」は「さ(さ)せませ」の形でも用いられていて他と異なっている。ではほかにどんな(軽い敬意)を表す命令表現を用いているのであるのか。

「こ」では、まず、「さ(さ)しめ」を圧倒的に多く用いる虎明本に注目し、「さ(さ)しめ」のあらわれる曲の『狂言記』における対応部分をとりあげ、両者の表現を比較する。

(4) 虎明本の「さ(さ)しめ」に対応する『狂言記』における命令表現⁷⁾

	虎明本	『狂言記』	用例数
A	さ(さ)しめ	さ(さ)せませ	10
B	さ(さ)しめ	さ(さ)しませ	5
C	さ(さ)しめ	さ(さ)っ(しゃれい)	3
D	さ(さ)しめ	くりゃれ	3
E	さ(さ)しめ	う	2
F	さ(さ)しめ	命令形	2
G	さ(さ)しめ	おしゃれ	2
H	さ(さ)しめ	お—やれ	1
I	さ(さ)しめ	さ(さ)しめ	1
J	さ(さ)しめ	その他	4
K	さ(さ)しめ	々	31
計			64

(用例) (明)は虎明本、(記)は『狂言記』(□)内は発話者→相手(虎明本における)を示す)

A 虎明本の「さ(さ)しめ」が『狂言記』の「せませ」に対応する例

① 明「どこからなりとも、きりたからぶ所から思ひのままにきらい」しめ【】「ぶあく」上三〇九一〇(「武悪→冠者」)

② 記「いそいでうた」せませ【】「武悪」巻五14ウ4

③ 明「よう耳をすまひてあかをこつてきか」しめ【】「しゅうろん」中四〇七15(「法華僧→浄土僧」)

7 々は「さ(さ)しめ」に直接対応する表現を求められなかったもの。

8 用例の出典は、虎明本は池田廣司・北原保雄(一九七三)、『狂言記』は北原保雄・大倉浩(一九八三)による。

9 虎明本「きらいしめ」(「ぶあく」)に対応する部分は、『狂言記』には三ヶ所見える。ここでは、台本で最初に出てきたセリフを該当箇所としたが、そのあと、「はやうつて」「くれいやれ」(巻五14ウ8)、「はやうつてくれ」(巻五14ウ11)の順に、「武悪」が冠者に自分を刀で殺すよう促すセリフがある。

〔記〕耳のあかをとりてきか【せませ】。(宗論「巻一23ウ6)

〔明〕こちへ【わたしめ】(文山だち「下五四8)〔源太夫↓長兵衛〕
〔記〕是へよら【せませ】(文山賊「巻四27才9)

虎明本「(き)しめ」が「狂言記」【せませ】に対応している例は、「宗論」にもっとも多く、一〇例中八例である。虎明本において「宗論」は「(き)しめ」の用例数が二例と「武悪」などに並んで多く、「(き)しめ」の多用されている曲とみてよい。虎明本「宗論」では頻繁に出てくる「(き)しめ」が「狂言記」ではほぼ「せませ」になっている。

B 虎明本「(き)しめ」が「狂言記」【(き)しませ】に対応する例

〔明〕あっちへゆか【しめ】(はぎ大名「上二九九5)「ていしゅ↓大名？」
〔記〕なんでもない事。とつとつか【しませ】(萩大名「巻一29ウ9)

〔明〕はやうこしらへて出【さしめ】(ぶあく「上三三三4)〔太郎↓武悪〕
〔記〕いそいでさまをかへて。で【さしませ】。(武悪「巻五16ウ5)

C 虎明本「(き)しめ」が「狂言記」【(き)しやれい】に対応する例

〔明〕のら【しめ】(薩摩のかみ「中三三三6)〔船頭↓出家〕

〔記〕さあ／＼のらつ【しやれい】(薩摩守「巻三20才6)

〔明〕けいこにいふてみ【さしめ】(おこさ「中二〇五9)〔女房↓おこ〕
〔記〕さ。したらばいふて。見【さつしやれい】。(内沙汰「巻二22才8)

D 虎明本「(き)しめ」が「狂言記」【くりやれ】に対応する例

〔明〕さらば【ちち】わたしめ【。】(ぶあく「上三〇七10)〔武悪→太郎冠者〕

〔記〕さあ／＼。そなたも。きて【くりやれ】。(武悪「巻五14才4)

E 虎明本「(き)しめ」が「狂言記」【う】に対応する例

〔明〕さらはおこ【さしめ】(薩摩のかみ「中三三四2)〔船頭↓出家〕

〔記〕いや船ちんの。もらいませ【う】。(薩摩守「巻三20ウ1)

〔明〕おこ【さしめ】(薩摩のかみ「中三三四5)〔船頭↓出家〕
〔記〕うけ取ませ【う】。(薩摩守「巻三20ウ6)

F 虎明本「(き)しめ」が「狂言記」命令形に対応する例

〔明〕なんでもなひ事。あちへゆか【しめ】(あくた川「下九〇14)〔上京↓下京〕

〔記〕なんでもない事。とつとつ【け】。(腰蓋「巻五40才6)

〔明〕とてもたすくる事はなるまひ、尋常に覚悟を【さしめ】(ぶあく「上三〇八12)
〔太郎冠者↓武悪〕

〔記〕このおほせぢや。かへ【せう】。(武悪「巻五14才11)

G 虎明本「(き)しめ」が「狂言記」【おしやれ】に対応する例

〔明〕とてももの事には【しめ】(いもじ「中一六八10)〔太郎冠者↓道行人〕

〔記〕いそいで【おしやれ】(伊文字「巻五8ウ5)

H 虎明本「(き)しめ」が「狂言記」【おーやれ】に対応する例

〔明〕わごりよからとか【しめ】(しゅうろん「下四〇七14)〔浄土僧↓法華僧〕

〔記〕まっ【お】かたり【やれ】(宗論「巻一23ウ5)

I 虎明本「(き)しめ」が「狂言記」【(き)しめ】に対応する例

「明」なふく／＼此太刀をもつてくれ【さしめ】(粟田口)上四九五(「大名→すり」)
「記」此刀を持て。くれ【さしめ】(粟田口)巻四9才2)

J その他

「明」きつねをつる道具をすてくれ【さしめ】(下二二五10)「きつね→おこ」

「記」その繩(な)を。すてくれ【わたたい】(こんくわい)巻二6ウ12)

「明」いやまついぬる程に、てらへ【わたしめ】(下二二五16)「きつね→おこ」

「記」なになりともようのことがあはば。寺へいふて【わたぐわい】¹⁰「こんくわい」巻二6ウ5)

「明」いそひでゆか【しめ】(ぶあく)上三〇七10(「太郎冠者→武悪」)

「記」申なをそうと。おつしやるほどに。いそいで【でやす】(武悪)巻五14才2)

「明」あとからくる人にとは【しめ】(いもじ)中一六八9(「通行人→太郎冠者」)
「記」又あとからくる物に。【つがしや】(伊文字)巻五8才13)

K 虎明本「さしめ」に直接対応する部分を求められなかったもの

「明」急でいは【しめ】(薩摩のかみ)中三二五4(「船頭→出家」)

「記」さああがらつしやれい。【して今のは】。……かみでおりやる。いや【そのあとが。聞きたうおりやる】。(薩摩守)巻三5才10)

『狂言記』では、以上のような命令表現が、虎明本の「さしめ」に対応している。
11) これからみても、「さしめ」の伝承は一樣ではなく、複雑であることがわかる。

7 まとめ

本稿では、「さしめ」が大蔵流とくに虎明本との近似の一指標となりうるのではないか、という仮説を提示した。たしかに、「さしめ」のみえる曲には、大蔵流との近似を何らかの点で指摘できる曲もいくつかあった。語に注目した版本狂言

10) 「わたたい」については、大倉浩(一九八八)、北原保雄・大倉浩(一九八三)八二頁に、「こんくわい」にだけみられる珍しい例であること、狐のことは中に用いられていること、「片言」の二に

又これへ遊あそばれよといふことを。近江あまこと葉には。こま【わたたい】(付け中川)といふ。

是は遊あそばらひといふ。ら文字を中ちゆう畧りやくしたること葉成はければ。よろしかるべけれど。いか
にぞいやしう聞え侍る歟。(「国語学大系 方言一」第九卷(一九三八年原本発行、一九七五
発行、国書刊行会)一九頁上段)

とあること、などが指摘されている。

11) 「さしめ」は吉川泰雄(一九六五)において「さしめす」「さしめす」と想定されている。ただし、御湯殿上日記を例に、「さしめす」と「さしめす」の共存にもふれられている。

「狂言記」の「さしめ」は全部で27例である。しかし、ある曲に集中してあらわれる。「宗論」6、「酢盤」7、「内沙汰」1、「茶盞」1、「相合傘」1、「文出紙」7、「柿売り」1、「武悪」3である。用例の多い曲をみると、虎明本で「さしめ」の多い曲あるいは、『狂言記』で「さしめ」のあらわれている曲ということがわかる。

記の曲の分類の可能性はすでに多く指摘されており、「(き)しめ」はその手掛かりのひとつとなりうるのではないだろうか。

ただし、筋立てには版本狂言記独自のものも認められた。大蔵流虎明本と比較して、『狂言記』の「(き)しめ」「(き)しませ」以外に用いられた命令表現をみると、そこにも、独自のものが伺われる。先行研究がすでに指摘する「わたい」などはその例とされよう。

また、和泉流和泉家古本、三百番集にも、少なくない「(き)しめ」がみられることから、「(き)しめ」一語だけで、大蔵流、虎明本との近似を述べようというのには限界があることもわかる。各曲の伝承のありようは、もっと複雑で、「(き)しめ」の他の語も考えに入れた上で、版本狂言記の位置づけが必要とされるようだ。本稿はその一部を示した。

〔引用文献〕

- 池田廣司(一九六七)『古狂言台本の発達に関する書誌的研究』(風間書房)
- 大倉浩(一九八五)『版本狂言記の「おりやる」と「おぢやる」——詞章整理のあとづけ——』『日本語と日本文学』五号(筑波大学国語国文学会)
- 大倉浩(一九八六)『おっしやる』小考「『狂言記(正篇)』の用例から」『静岡英和女学院短期大学紀要』一八号
- 大倉浩(一九八七)『天理本狂言六義の「(き)さある」』『静岡英和女学院短期大学紀要』九号
- 大倉浩(一九八八)『狂言記(正篇)の俗語——「かたこと」の記述と対照して——』『静岡英和女学院短期大学紀要』二〇号
- 大倉浩(一九九一)『狂言記外篇の「まらする」』『国語国文』六八三号
- 大倉浩(一九九五)『狂言記にみるサ行四段動詞のイ音便化』『文藝言語研究 言語篇』二七(筑波大学文芸・言語学系紀要)
- 大塚光信(一九六六)『抄物とその助動詞三つ』『国語国文』三五―五
- 大塚光信(一九八六)『シマウからシム』『京都教育大学国文学会誌』二二号(『抄物きりしたん資料私注』清文堂一九九六所収)
- 亀井孝(一九四四)『狂言のことば』『能楽全書』第五卷(創元社)
- 小林賢次(一九八〇)『版本狂言記における「ゴザル・オリヤル・オチャルとその否定表現形式」』『近代語研究』六集(武蔵野書院)
- 小林賢次(一九八五、二)『言語資料としての「続狂言記」』『続狂言記の研究』勉誠社、第四章)
- 小林賢次(一九八五、五)『中世語資料としての狂言台本』『日本語学』四巻五号(明治書院)
- 小林賢次(一九九〇)『言語資料としての「狂言六義」——「ゴザル・オリヤル・マラスル・マスル、サラバ・ソレナラバ」の分布から——』『近代語研究』八集(武蔵野書院)
- 小林賢次(一九九三)『言語資料としての和泉家古本「六議」——天理本「狂言六義」との比較をとおして——』『近代語研究』九集(武蔵野書院)
- 小林賢次(一九九四)『固定期狂言台本における「ゴザリマスル」』(佐藤喜代治編『国語論究 第5集 中世語の研究』明治書院)

峰谷清人(一九七七)『狂言台本の国語学的研究』(笠間書院)

峰谷清人(一九八六)『鶯流台本と、狂言』とば、「芸稽古伝」の記述をめぐって」(佐藤喜代治編『国語論究 第一集 語彙の研究』明治書院)

湯沢幸吉郎(一九二九)『足利期の敬語助動詞シモ・シムに就いて』『国語と国文学』六一九
湯沢幸吉郎(一九五五)『室町時代言語の研究』第五節「シム、サシム。シモ、サシモ。」
(風間書房)

山崎久之(一九六三)『国語待遇表現体系の研究 近世篇』武蔵野書院

吉川泰雄(一九六五)「シマス・サシマス考」『近代語研究』一集(武蔵野書院)

『日本大文典』(ロドリゲス、土井忠生訳注、一九五五、三省堂)

〔参照した狂言台本(【】内は本稿での略称)〕¹²
古川久編『狂言古本二種』(わんや書店、一九六四)【天正本】(天正六年(一五七八)奥書)

〔大藏流〕

池田廣司・北原保雄(一九七三)『大藏流虎明本狂言集の研究』本文篇(表現社)【虎明本】

〔寛永十九年(一六四二)書写〕

古川久編『狂言古本二種』(わんや書店、一九六四)【虎清本】(正保三年(一六四六)書写)
笹野堅校訂(一九四二)『大倉虎寛本 能狂言』上・中・下(岩波書店)【虎寛本】(寛政四年(一七九二)書写)

〔鶯流〕

『天理図書館善本叢書 鶯流狂言傳書 保教本』(一〜四)(八木書店、一九八四)【保教本】
〔元禄末〜正徳年間(一七〇〇前後)〜一七一六)ころ書写〕

古川久校注(一九五六)『狂言集』(日本古典全書)朝日新聞社【賢通本】(安政二年(一八八五)書写)

〔和泉流〕

北原保雄・小林賢次(一九九二)『狂言六義全注』(勉誠社)【天理本】(寛永年中(一六二四)〜一六四三)書写)

芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第四卷 狂言(三一書房、一九七五)【和泉家古本】

〔承応〜元禄(一六五二〜一六八八)のころ書写〕

野々村戒三・安藤常次郎校注『狂言三百番集』上・下(富山房、一九三八)【三百番集】(幕末の和泉流三宅庄市(文政七年(一八二四)〜明治十八年(一八八五))手沢本約二百六十番に他流の番外曲など加えて翻刻されたもの)

〔版本狂言記〕

北原保雄・大倉浩(一九八三)『狂言記の研究 影印篇・解説篇・翻字篇・索引篇』(勉誠社)
『狂言記』(万治三年(一六六〇)刊、ただし、本稿の用例は寛文二年版を底本とした北原保雄・大倉浩(一九八三)による。)

『狂言記 下』(有朋堂文庫)大正十五年八月【狂言記外篇】(元禄十三年(一七〇〇)刊)

北原保雄・小林賢次(一九八五)『続狂言記の研究』(勉誠社)【続狂言記】(元禄十三年(一七〇〇)刊)

北原保雄・吉見孝夫(一九八七)『狂言記拾遺の研究』(勉誠社)【狂言記拾遺】(享保十五年(一七三〇)刊)

このほか、データの確認作業の過程で、村上昭子氏によるテキストファイル(天理図書館善本叢書と書之部第23巻 狂言六義上)(昭和50年刊)『天理図書館善本叢書と書之部第24巻 狂言六義下』『天理図書館善本叢書と書之部第24巻 狂言六義抜書』(昭和51年刊 八木書店)、山本靖氏によるテキストファイル(『狂言記 下』(有朋堂文庫)大正十五年八月)を

12 狂言台本の書写年代などは、峰谷清人(一九七七)三三四頁〜三六六頁によった。

も使用した。諸氏に御礼申し上げます。

また、原稿提出後、新日本古典文学大系58『狂言記』（橋本朝生・土井洋一校注 岩波書店 一九九六、一一）により、『狂言記外篇』の用例を確認した。

〔付記〕

本稿は、東京都立大学大学院の演習日本語学特論第二（小林賢次先生）をきっかけにしている。ご指導いただいた先生と意見をくださった方々に御礼申し上げます。

（なかがわ みわ・東京都立大学大学院生）